
高橋さん 3rd Extreme (神様歴3年2ヶ月。時給1000ゴッド)

ふえにもーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高橋さん 3rd Extreme （神様歴3年2ヶ月。時給1000ゴッド）

【Nコード】

N15620

【作者名】

ふえにもーる

【あらすじ】

求人情報誌ポットペッパーで見つけた、神様の仕事をしているけども最近めんどくさいことにはかり巻き込まれている高橋さん（♀・28歳独身）のお話です。

ぜんぺん

高橋さん（♀・28歳独身）のお話です。

これまでのあらすじ&2話と3話の間のあらすじ

高橋千奈美の暮らすこの神界は、人間界の一つ上の次元に存在しており、気象やイベントなど、ある程度のコントロールをしている世界である。

仕事の忙しさも収まってきた年明け。高橋の上司である鈴木が失踪した事件がきっかけとなって、高橋は動き出した。数ヶ月かけてつかんだ真実は驚くべきもので、実は彼女が住んでいる神界の上にも更に支配者の世界が存在する可能性があったのだ。

時給1000ゴッドという、お世辞にも高いとはいえない給料である（人間界換算で時給約800円）神様のアルバイトを続ける中、更に高位の次元の揺らぎを発見する事に成功した。

そして、彼女は異世界の戦地へと赴く。口の臭いどうしようもない上司を連れ戻し、終電前に早く帰るため、自身の仕事の量を何とかして減らすために。あと、恩を売って給料を上げてもらうために――。

高橋さん 3rd Extreme （神様歴3年2ヶ月。時給1000ゴッド）

でさあ、この世界って一体何なの？

「どうでい、ウチのラーメンは一味違うだろ？ ドラゴンゾンビの濃汁背脂をこってりと配合した代々自慢の味噌スープだぜ」

「はい、おいしいですね。この背脂の意外なまでの臭みの無さと、食欲を誘う濃厚な匂い。ラーメンと相性ぴったりだと思います」

何で私、異世界に来てラーメンとか食べてんのかな。予定では、この世界はおどろおどろしい暗黒が空に渦巻いていて、死者の都の如くモンスターがはいかいしていると思っていたのに。

神界にも普通に有りそうな、横丁の切符の良いおじさんの切り盛りする小さなラーメン屋で、なぜか私は今ドラゴンラーメンと餃子、キムチを頼んでカウンターで食べている。後でブレスフレッシュ噛んでおかなきゃ。餃子はんにくたつぷりだし。

この世界は常に夕暮れ。いくら時間が経とうとも、寂しい夕暮れが街を包んでいる。朝が無ければ、夜が来る事も無い。寝ても覚めてもいつでも夕陽が見られる。そんなだから、この世界の人達は時間の概念に乏しい。永遠とも思える夕陽の中で、ただゆったりと流れてゆく時に身を任せているといった感じた。

世界の中心にあるご神木ユグドラシルの頂上にて禁断のゲートを開き、この世界に辿り着いて早一週間が経とうとしている。未だに鈴木部長の手がかりはつかめない。あの口臭い男を連れ戻さないと、仕事が忙しすぎて私の身がもたないのだ。

全く、神界では崩壊イベント起こそうとばかりするし、居なくなったら居なくなっただで使えない部下ばかりだから結局忙しくなる。私に安息は無いのかな。

「まあ、姉さんにどんな事情があるのかは知らねえが……、あんまり深く悩まない方がいいぜ」

ああもうバカ、いちいちこのおじさんカッコイイんだよ！ タバコ吸う姿に妙に色気があるしさあ。惚れちゃったらどうすんのさ。きつと歳の差三十五歳くらいだけど。

「ちいっす」

その時扉を思い切り開けて入ってきた男は、高橋の心を一瞬でおじさんから奪い取るのに十分であった。

（うわ、イケメン）

歳は高橋より下であろう。愛嬌のある優しそうな二重の瞳に、フエミニンなセミロングに伸ばした髪がにくい。年下好きな高橋にとっても、にんにくたつぷりを摂取した自身の臭い息の漏れる口で唇を奪いたいくらいであった。

男は高橋には目もくれずにカウンター席へと慣れた調子で座り、お品書きすらも見ずに注文した。

「ラブ&ピースつけめん大盛り。ねぎ大盛りにして。きゅうりいらね」

「あいよ」

「たまには大盛り分おまけとかしてくれよ」

「やだね」

離れた席からちらりちらりと見る高橋の目は、どこか輝いている。上から下まで気付かれないように見回し、中性的な顔立ちを眺めた。
(いいなあ、こんな彼氏)

高橋の頭の中では、鈴木が存在が薄れ掛けてきていた。

ちゅうへん

頭の中では、鈴木が存在が薄れ掛けてきていた。窓の加減で彼の髪が橙色に照らされ、炎のように輝いて映る。そんな後ろ姿を見て、一人心臓が高鳴り始めた。

（あ、あれ、何で私こんな興奮して――）
「なあ」

イケメンはポケットに手をつ込んだまま振り返り、同じカウンターの離れた席に控え目に座る私へと瞳を向けた。その眼差しは目尻が親しみのある柔らかなもので、どこか女性的なイメージも漂っている。

そんな中、ラーメン屋の主人は脇目も触れずせつせとつけめんを作っている。

「人の事見てんじゃねえよ、おばさん」

私の中で何かが砕けたのを感じ、足早にラーメン屋を後にした。永遠に続く夕暮れの中、子供達が無邪気に駆け回っている公園を見つけて自然と惹かれるように入ってしまった。ベンチに腰を下ろし、溜息を一つ漏らす。

公園を我が物顔で跳ねている子供達。広場中央に鎮座しているゴブリンみたいなモンスター物体？の銅像の周りで、陰に隠れたりしながら勢い良く水風船をぶつけ合っている。しかも中身は得体の知れない真つ黄色い液体で、物体？は見る見る内にべっちゃりとイエロープリンスになっていく。何その液体。マスタード？ 子供のおもちやにしてはレベル高すぎない？

お願いだからこつちにまで投げないでね。別に物体？が黄色レンジャーになっても私は構わないから。ていうか、マジそれ器物損壊。学校に通報されるよ。

一体こんな異世界にまでやってきて私は何をやっているのだろうか。どっかの男にはおばさんとか言われるし。確かに最近、肌が水を弾かなくなっただけ。

いつその事もう帰ろうかな、疲れたし。鈴木部長なんかもう一生、九十歳のばるきりーとちゅっちゅして、ぱこばこしてればいいよ。

ああ、お母さんの作ったみそおでんが久しぶりに食べたい。帰っちゃおうかな。その気になればすぐに帰れちゃうんだから。簡単なんだからね。ちゃんと帰る方法も下調べした上で来てるんだから。

トワイライトツリーの頂上から神界に帰れる事はとくに調査済みなんだからね。

ま、帰ったら新しい仕事でも探そうかな。いつまでも神様なんかやってらんないよ、自給安いしさあ。しかもろくな男が居やしない大体、今の人間界のイベントスケジュール立てやってんのって全部私なんだよ。元々は鈴木部長の仕事だったのに。あの人もあの人で世界崩壊イベントばかりやりたがるからスケジュール組み直すの大変だったけど。

特に最近忙しいから、私は大まかなスケジュール立てだけして細かい調整を仕事の出来ない田中にやらせている。ばか丸出しな彼は、やはりスケジュール調整も下手くそだ。気温や天候の管理もまともに出来やしない。夏が終わったってのにいつまでもたらだと暑い日が続けたり、次の日から思い出したように急に冬の気温にしたりとかさ。そんな事やってたら人間達死んじゃうでしょうよ。ああもう、人さえ足りてればさっさとクビにして追い出しちゃう所なのに。

お陰で、人間界での生活バランスが乱れ始めてる。氣候がおかしいせいで作物が育たない状況になってるみたい。田中ばかすぎる。いつかころす。

んー、まあ鈴木部長が居ないせいで忙しいのは事実だけど、あの人が居ないから二。十二年の世界崩壊イベントが起きなくなったのは良い事ね。

いずれにせよ、もうあんな仕事をずっと続ける気力は無い。時給1000ゴッドなんて今時無いっての。人に話したら笑われちゃう。

「あれ」

街中パンフレットに書いてあった『秘境トワイライトツリー』のあるべき場所には工事中看板が立っており、『大型ショッピングセンター建設予定地』と書かれていた。

「トワイライトツリーは……？」

いっへん

一大観光地がいつの間にか閉鎖していた事に愕然としながらも、横の看板に目を向けると控え目な小さな文字でこう書かれていた。

『移転しました。神界ツアーのお問い合わせについては0987-654-321までご連絡ください』

……セーフ。帰れなくなるかと思った。バッグから携帯魔法電話を取り出し、早速書かれていた番号をプッシュする。するとしわがれた声のおじいちゃんが、ふがふが言いながら電話に出た。多分なにか食ってる。

「もしゅもしゅ。神界ツアー管理じゅむ局でしゅ」

バリバリ音させてるし。せんべいか何か？ いずれにせよ客相手の電話応対して良い人物ではない気がする。

「あの、神界へと行ってみたいんですけどどうすればいいですか。なんかパンフに書かれていた場所に行ったら移転しましたってなってたんで、魔法電話してみました」

「神界ツアーは期間限定でしゅたので現じゃいは予定はありみやせん」

「は？」

期待を裏切る答えに、思わず間抜けな声を出してしまった。

「パンフレチヨにも書かれていますかと」

不意に魔法電話を取り落とし、震える手でバッグから顔を覗かせているパンフレットへと手を伸ばす。この街の観光スポットが網羅されたものだ。読み落としなど――。

（やってしまった……）

トワイライトツリーの説明の所には米印が付いており、隣には数字の「一」の字が。一番下の小さな補足説明がズラズラと書かれている部分をよく読んでみると確かに、『神界ツアーは期間限定です』さあどうしよう。帰る術が消えた。準備に準備を重ねてこの帰還

方法を調べ上げたのに、それでも準備不足であった。こうなったら他の方法を意地になつて探すか、この街で永住するか覚悟を決めなければならぬかもしれない。

（でもなあ、帰つてもアレだしね）

ろくでもない仕事に、上司（行方不明）に部下。安い時給で、スーパーぜうすの豚挽き肉。お昼は食パンをレンジでチン。100ゴツドのチョコクリーム塗つてはい、いただきます。何コレ。あーもー、私だつてオフィス街のOLなんだから優雅にバジリコ乗ったパスタとか食べに行きたいつてのー！

ただ一つだけ気がかりなのは、たつた一人の肉親のお母さんの事。寂しいなあ。元気にしてるかなあ。やつぱり、帰る方法を探そう。きつと何かあるはずだよ。

と、一人道端で意気込んでいると、買い物袋を両手に提げたどこかのおばちゃんが変な人を見るかのようによそよそしい態度で目の前を去つていった。うう、何かに負けた気がする。何かに。

とりあえず、一つ考えられるのは、この世界も神界と同じく縦階層で成り立っているはずだつて事。要するに、世界の上に更に世界が存在していて、それが延々と続いているという可能性。今いる世界は、上の階層の世界によって支配されている。そして一つ下の世界を支配している。私の元々住んでいた神界がどの階層にいるのかは分からないけど、実際そんなに高位でもないような気がする。

だつて、レベル低い世界だし。神なんてやってる事、人間と変わらないし（ていうか一応私も、人間から見たら神様なんですよ）。神つて、人間と同じでただの種族の一つに過ぎないしね。体の造りだつて大して変わんないらしいよ。要するに柴犬と、ヴァルハラ犬の違いみたいなもの。つて犬と比べてどーすんだ私。惨めになつてきた。

まとめると、神界が人間界をコントロールしているように、こちらからも神界へと入り込める余地はあるはず。現に九十歳のぼるきりーは人間界へ行つてしまったのだから、生身の神が世界を行き来

する方法も出来るでしょ。やるべき事は一つしかない。神界を操っているその現場を見つける事。こちらにも管理者が必ず居るはず。

不思議な事に、持ってきたお金がこの世界でも通用した。私達の神界ではこの通貨を『ゴッド』と呼んでいるのだけでも、こちらでは『デイメンション』と呼んでいるみたい。しかも使っている紙幣も何故か全く同じもの。故に店で出しても全く不審がられるどころか、当たり前を受け取ってもらえて品物を手に入れる事が出来る。やっぱり、この世界が神界の創造主なんだ。神界はきつとこの世界が元になって出来てる。だってこっちは『スーパ―あるてみす』とかあるよ？ 軽く覗いてみたらやっぱり豚挽き肉安い。買っ……うわけにはいかないってば。家に帰れるかどうか保証無いんだし。歩けど歩けど神界と似たような街並みが続くけど、ここは別次元なんだよね……。

夜にはならないけど、時間だけはちゃんと経過しているみたい。時計だけはもう夜の七時になってる。でも景色は夕方のまま。飲み屋の明かりが点いていて、中からはテレビの明かりと男達の酒盛りの声が聞こえる。

観察すれば、神界との類似点は数え切れないほどあった。一気に自分の世界が恋しくなってくる。

（はぁ、こんな世界来なければ良かったなあ）

数時間歩き回った後、繁華街の中にインターネットカフェを見つけた。帰る手段が見つからないものかと、席に着くなりコンピュータで検索を始める。それらしいキーワードを打ち込んでいく。

（これ……）

『求人情報ぽつとぺつぷあー』

どこかで見たような名前がスポンサーサイトの所に出ている。それに惹かれるようにして手が動いた。

『アルバイト・パート。本物の神界の管理者、やってみませんか？

誰でも出来る簡単なお仕事です。学生さん、パートさん集まれ！
週に一・二日、半日しか出れない方でもオッケーです』

「バカにしてんの？ これ」

何だか神界が軽い存在に思えてくる求人の内容であつたが、何とか解決の糸口が見えてきたようであつた。

T o b e c o n t i n u e d . n e x t t h e 4 t h
c h a p t e r .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1562o/>

高橋さん 3rd Extreme（神様歴3年2ヶ月。時給1000ゴッド）

2010年11月7日00時11分発行